

中世考古学から見る中世都市博多

鈴木康之(県立広島大学 人間文化学部)

■ 中世考古学の特質

➤ 考古学とは？

- ◇ 人間集団の歴史を、物質的痕跡をもとに復元していく学問
 - 物質的痕跡＝地中に残された遺跡や遺物
- ◇ 文字のない時代(先史時代)を中心に研究が進められてきた
 - 本来は、あらゆる時代に有効な方法
- ◇ 文字資料への偏重
 - 「歴史」＝history の二つの意味
 - 時間の経過によって変遷したありさま
 - 文字に記された歴史:「有史以来……」「先史時代」

➤ 文字記録の偏り

- ◇ 中世文書の形成・伝来過程
 - 中世から近世にかけての支配階層であった武士によって形成されたものを中心とする
 - 領地支配の根拠となる証拠書類が大切に保管されてきた
 - 年貢徴収の基盤となる田畠についての記載が多い
 - それ以外の文字記録の伝来はきわめて少ない
 - 手工業・商業・輸送業・金融業の実態が不明
 - ◇ 「日本の中世社会は農業を中心とする自給的な社会であった」とする考え方が形成される

➤ 物質資料から明らかになること

- ◇ 中世の物質資料への関心(戦前からの研究の蓄積)
 - 陶磁器、石造物(石塔など)、鑄造品(梵鐘など)
- ◇ 日常的な生活の場の解明
 - 集落・都市・居館、生産・流通・消費に関する遺跡
 - 1970 年代以降の国土開発の激化
 - 多様な遺跡が発掘調査の対象に
 - 文字資料では明らかにしがたかった社会の様相が明らかに
 - 人々の生活の実態
 - 諸産業における生産・流通・消費の実態
 - 考古学的な調査研究が、中世史研究に不可欠なものであることが認識されていく

■ 中世考古学のさきがけ

- 中世考古学の有効性を認識させた 2 つの遺跡
 - ◇ 一乗谷朝倉氏遺跡
 - ◇ 草戸千軒町遺跡
 - ◇ 具体的な発掘調査成果によって、中世遺跡の発掘調査の重要性を提起
- 一乗谷朝倉氏遺跡(福井県福井市)
 - ◇ 戦国大名朝倉氏の城下町
 - 天正元年(1573)織田信長によって焼き滅ぼされる
 - 柴田勝家は天正 3 年(1575)、あらたに北ノ庄城を拠点に
 - 一乗谷は地中に埋もれる
 - ◇ 発掘調査の開始と遺跡の整備
 - 昭和 47 年(1972)福井県は朝倉氏遺跡調査研究所を開設
 - 発掘調査と整備を継続
 - ◇ 平成 19 年(2007)出土品のうち 2,343 点が国の重要文化財に
- 草戸千軒町遺跡(広島県福山市)
 - ◇ 芦田川河口に位置する港湾集落
 - 近世地誌に伝説の町として記載される
 - その存在が文字資料に残らない集落
 - ◇ 河川改修工事と発掘調査
 - 昭和初期の治水工事で、遺跡は芦田川の河川敷に埋もれる
 - 遺跡は中洲として残るが、1970 年代に河川改修工事により消滅の危機
 - 広島県教育委員会による発掘調査により 13 世紀中頃から 16 世紀初頭にかけての港湾集落の姿が明らかに
 - ◇ 平成 16 年(2004)出土品のうち 2,930 点が国の重要文化財に
- 2 つの遺跡の特徴
 - ◇ 中世の町の姿を明らかにした
 - 城下町と港町
 - ◇ 中世の町にはその後も地方拠点として発展しているものが多く、当時の姿の復元が困難
 - 博多・堺・京都・鎌倉など
 - ◇ 近世初頭までに衰退し、地中に埋もれた町の発掘調査が、中世考古学の有効性を示した
 - その後、各地で展開する中世都市遺跡研究のきっかけとなる

■ 中世考古学が明らかにした瀬戸内海流通

- 多様な物資の広範な流通
 - ◇ 必ずしも京都へと向かわない物流が大きな比重を占めていた
 - 流通・輸送業の発達、貨幣経済の進展
- 国産陶器の流通
 - ◇ 常滑焼・東播系須恵器などの瀬戸内地域における流通
- 輸入陶磁器の普及
 - ◇ 限られた階層向けの製品と考えられていた中国産陶磁器などが、地方の集落にも普及していた
 - ◇ 博多における貿易体制の変遷と結び付けて理解できるようになった
 - 鴻臚館貿易→博多津唐房を拠点とする貿易→博多津唐房の解体
- 『兵庫北関入船納帳』に記された港湾
 - ◇ 兵庫津における文安2年(1445)ほぼ一年分の徴税台帳
 - 日付ごとに船の船籍地・船頭・積載物・積載量・徴税額・収納日・問丸名などが記される
 - 15世紀中頃の瀬戸内海の物流の見取り図
 - ◇ 東瀬戸内海の港湾が多く、西瀬戸内海の港湾が少ない
 - 重層的な集荷・輸送システムの存在をうかがわせる
 - ◇ 基幹港湾・地域港湾の役割分担
 - 瀬戸内海航路に直結する港湾と、地域に密着した港湾

		兵庫北関入船納帳 九月十三日条				
		【船籍地】	【積載品・数量】	【税額・納入日】	【船頭】	【問丸】
	三原	備後百七十石	九百文	九月廿三日	四郎二郎	木や
	犬嶋	備後二百六十石	一貫三百四十五文	九月廿九日	三郎九郎	二郎三郎
	尾道	備後二百廿石	一貫四百文	十月五日	藤二郎	衛門四郎
		金十駄				
		備後二百廿石	一貫百四十五文	十月三日	又四郎	孫太郎
	瀬戸田	備後二百石	一貫四十五文	十月五日	三郎五郎	孫太郎
		備後五百石	二貫五百四十五文	十月五日	孫三郎	衛門四郎
		備後三百八十五石	二貫四百文	九月廿六日	左近二郎	
		金廿駄				
		備後三百廿石	一貫六百文	十月五日	衛門三郎	
		備後四百五十石	二貫三百文		四郎三郎	孫太郎
	杭瀬	米卅五石ハンサウ	三百七十文	当日納	三郎	

兵庫北関入船納帳 九月十三日の一部分



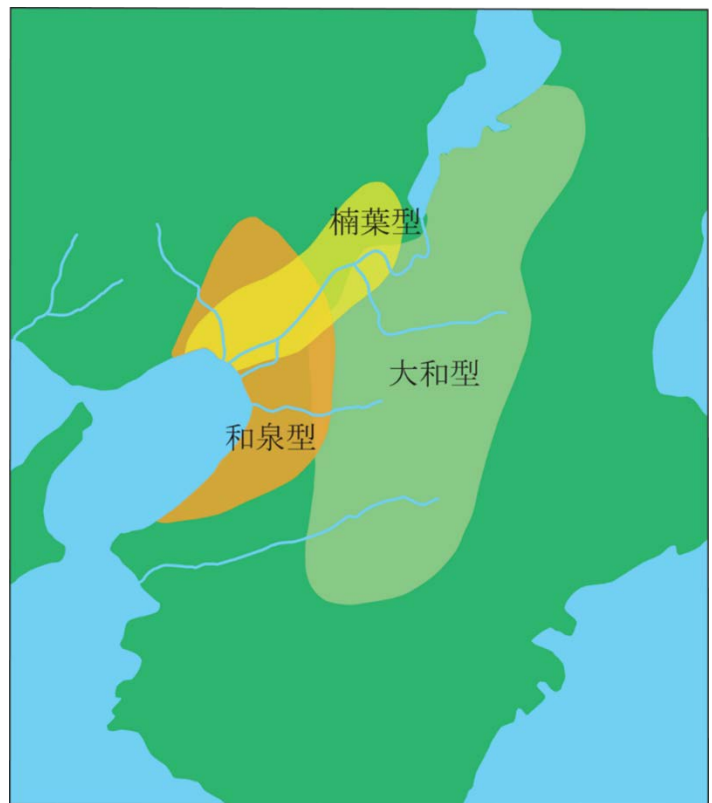
『兵庫北関入船納帳』に記された船籍地の分布

■ 瀬戸内海流通における博多の位置づけ

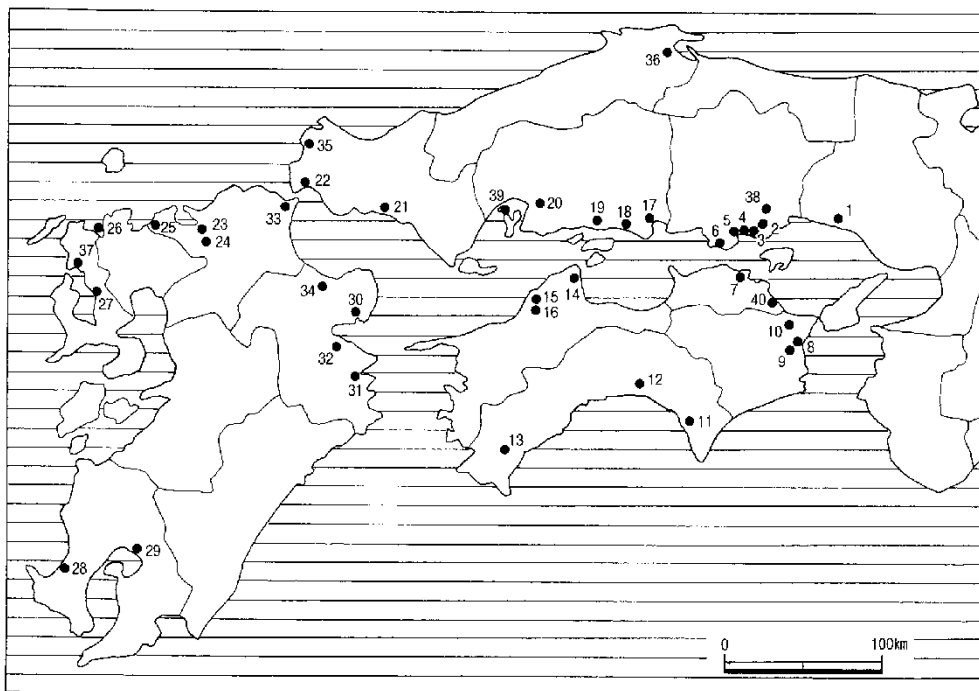
➢ 畿内との結びつき

◇ 畿内産瓦器碗の出土

- 瀬戸内地域を中心に西日本
 一帯(一部東日本にも)に分布
- 楠葉型の出土(11世紀後半～
 12世紀前半):博多出土瓦器
 碗の大半
 - 官衙などで限定的に出土
 - 対外貿易の利益が、権門
 勢力を吸引したと解釈で
 きる
- 和泉型の出土(12世紀後半～
 13世紀):博多での出土量は
 必ずしも多くない
 - 瀬戸内地域では大量に
 出土
 - 荘園公領制下における物
 流の活性化を示す



畿内産瓦器の地域型



畿内産瓦器碗の分布(橋本 2009)

結物の出現と普及

➤ 円筒形木製容器の変遷

◇ 桶と樽

- 固定された蓋の有無で区分

◇ 構造による分類

- 刳物(くりもの)・曲物(まげもの)・結物(ゆいもの)

◇ 構造と機能を組み合わせた分類(理論上の)

- 刳桶・刳樽、曲桶・曲樽、結桶・結樽、結筒

➤ 刳物の歴史

◇ 弥生時代後期には出土例あり

- 北陸、西日本の日本海側を中心に分布
- 弥生時代以来の伝統が中世にも受け継がれる

◇ 原材料(丸太)が確保できれば、大型品の製作も可能

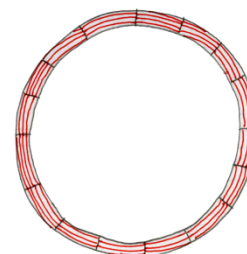
◇ 重量があり、木材の無駄が多い

➤ 曲物の歴史

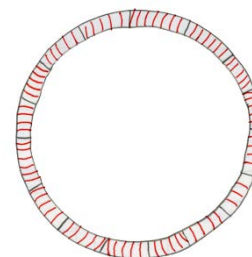
◇ 容器として確実な例は古墳時代頃から

- 8世紀には定形化した曲桶が量産化
- 中世を通じて最も普遍的に使われた容器
- 現在もなお利用され続ける(曲げわっぱ)

◇ 軽量で、比較的容易に製作できるが、薄板を利用するため強度がなく、大型品の製作が困難(補強が必要)



柁目取り

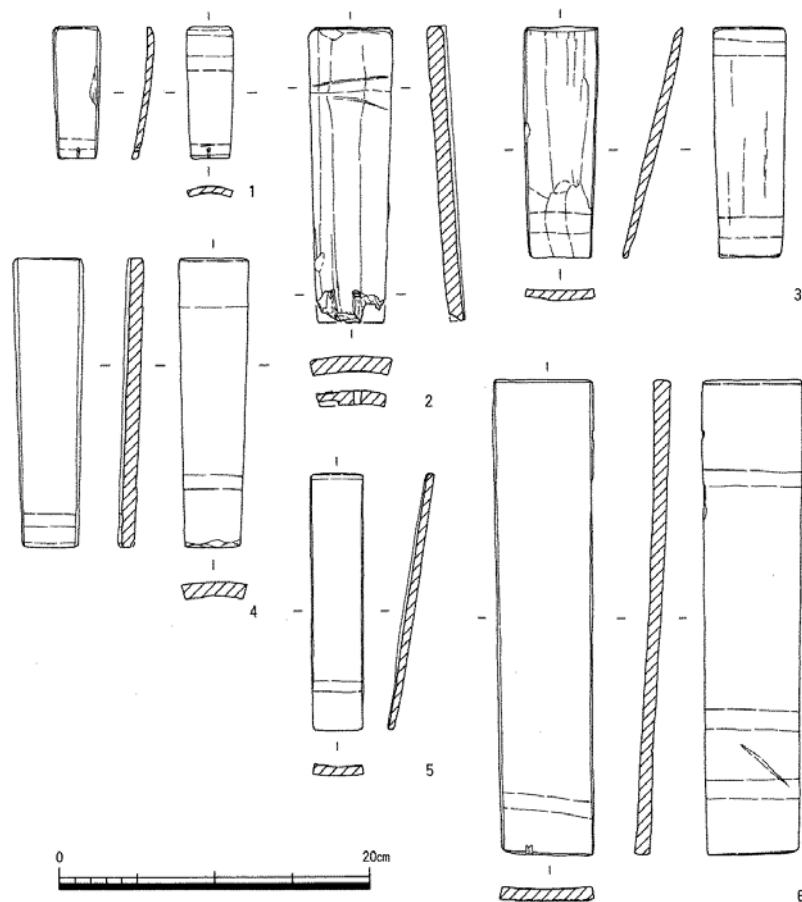


板目取り

- 結物の歴史
 - ◇ 絵画資料からは、鎌倉末から南北朝時代に出現したと考えられてきた
 - 博多遺跡群の調査成果により11世紀末～12世紀初頭にまで遡る
 - ◇ 近世以降は円筒形木製容器の主流となり、生活・産業のさまざまな分野を支える
 - ◇ 短冊形のパーツを組み合わせるため、木材資源を有効利用しながら大型品の製作が可能
 - ◇ 側板の正確な加工が必要
- 出現期(11世紀末～12世紀)
 - ◇ 博多遺跡群の井戸枠として登場
 - ◇ 12世紀にはほとんどの井戸が結物に
 - ◇ この時期、北部九州以外には波及しない
 - ◇ 日宋貿易に関与した宋商人の生活文化の一環としてもたらされる
 - 陶磁器などと異なり、商品として日本国内には流通しなかった
- 拡散期(13世紀から14世紀にかけて)
 - ◇ 瀬戸内地域以東にも限定的に分布
 - ◇ 宋の生活文化の拡散現象
 - ◇ 絵画資料に見る曲物から結物への変化
 - ◇ 「北野天神縁起」の場合
- 普及期(15世紀～)
 - ◇ 東日本を含む列島全体で出土例が増加
 - ◇ 普及の背景
 - 木材加工技術の革新
 - 鎌(セン)あるいは台鉋に似た工具による加工
 - 新たな加工具により効率的な生産が可能になる
 - 専門的な職人集団の確立＝結桶師など

文献資料に見る結物製作工人

年号	西暦	記事	出典
延慶二年	1309	「厨のゆい桶」の修理を「番匠」に発注	『海龍王寺文書』
嘉慶二年	1388	結桶製作の手間賃を番匠とは別の職人に支払う	『教王護国寺文書』
応永十四年	1407	「縛桶」を「湯桶師」に発注	<small>のりとき</small> 『教言 卿記』
文明十二年	1480	「ゆいおけゆい」	『山科家礼記』
明応三年	1494	「結桶師」	『三十二番職人歌合』



草戸千軒町遺跡から出土した結物の側板

■ 中世考古学から見る博多遺跡群の意義

➤ 対外貿易港の実態解明

◇ 鴻臚館から博多、さらには福岡へと変遷する都市

- 具体的な都市の姿と、そこで活動した人々の生活を明らかにした
- 対外貿易の諸段階を物質資料で明らかにした
- とくに「博多津唐房」の実態について
 - 日本的と考えられている文化的要素の多くが、対外交渉の結果受容されたものであることを、具体的な資料とともに明らかにした
- 今後の調査・研究の進展に期待

➤ 京都中心史観の相対化

◇ 文献資料を中心に形成された中世史像

- 資料の残る京都からの視点
- 京都を中心に同心円状に広がる求心的なものの動き

◇ 物質資料による流通の実態

- 東アジアにおける物資流通を構成する一要素に過ぎない
 - 日本列島における流通を相対化する役割

【参考文献】

大庭康時 2009『中世日本最大の貿易都市 博多遺跡群』新泉社

大庭康時ほか編 2008『中世都市・博多を掘る』海鳥社

小野正敏 1997『戦国城下町の考古学——乗谷からのメッセージ』講談社

鈴木康之 2007『中世瀬戸内の港町 草戸千軒町遺跡』新泉社

橋本久和 2009『中世考古学と地域・流通』真陽社